日本歯科医史学会々誌・第3巻
第2号通巻10号・昭和50年10月

川柳にみられる歯科医療風俗史（第1報）

谷津三雄* 出地 弘*
中村 一* 松本好正*

川柳の名称は前句附の点者，柄井八右衛門川柳（1718～1790）の筆名に由来するが，一般に川柳と称されるものは五・七・五文字の短詩で中世の「誹諧」に源を発し，江戸時代になってからは広く庶民の文芸となり更に後世になってからは，つとめて通俗的な言葉を用いて人生の機微や世態の欠陥を滑稽にまた，風刺的に描写するものとなった．従って，歯科に関係する川柳をまとめておくことは歯科医学史を，歯科風俗史乃至は歯科文化史的に研究する資料として重要である．

研究資料：

1. 山本成之助著：川柳医療風俗史（牧野出版，東京，昭和47年9月刊）
2. 田辺貞之助著：古川柳風俗事典（青蛙房，東京，昭和37年7月刊）
3. 三上三太郎著：川柳入門（大文館，大阪，昭和35年3月刊）
4. 岸本水府選評：放送川柳（新日本放送，大阪，昭和30年4月刊）
5. 川上三太郎編：新川柳一万句集（磯部甲陽，東京，昭和6年2月刊，4版）
6. 読売新聞（昭和50年1月～3月）の川柳覧等を研究資料とし歯科と関係ある川柳について集録した．

1. 山本成之助著：川柳医療風俗史

各種の薬種の項（p. 73）に

- 食ひしばる歯へ気付け一匙（文政4，1821）

診療風俗の項（p. 94）の医師の家族と従業員を詠んだものの中に，

- 抜いた跡，掃除している歯科の妻（明治42，1909）

各科の医師，その他の項の歯科医師（p. 96）の項に

- この窩を充塡したし歯科の後家（明治31，1898）
- 砂糖税，歯医者の方で不賛成（明治41，1908）

—課税されると砂糖の消費が減り，その結果むし歯の患者が減るからであろう．ところで現在は，砂糖の消費増えれば歯科医患者もてあまし，とでもなろうか—

- 御子孫のためにと歯科医，金勧め（大正3，1914）

各種の病気の項のその他の病気に（p. 127）

- 虫歯へ有平・女房へ妓の話（明治13，1880）—有平は有平糖という南蛮渡来の製法でつくった棒状の砂糖菓子は害があるのと同様に女房に芸者の話をするのも害があるとの意であろう—
- 噛み分けのできる頃には歯もまばら（明治27，1894）
- すき櫛の歯答へもなし禿あたま（明治11，1878）

2. 田辺貞之助著：古川柳風俗事典

第2部巷の巻の項の雪隠（p. 78）に

- 雪隠で歯をみがいている居候

雪隠とは便所のことであるが，雪をかぶった繁みのかげにかくれているささやかな小屋を想像すると，きたならしくない雅味がある．しかし川柳での雪隠は長屋の共同便所のことで，必ず二つ並んでいたらしい．これを総後架といって，そこで恋のささやきが行われたという．

むかし歯をみがくのは生意気なことだと思われていた．そこで，雪隠でみがいたのであろうが，

History of Dental Service found in Senryu (the first Peport)

* Mitsuo YATSU, Hiroshi SHICHI, Hajime NAKAMURA, Yoshimasa MATSUMOTO
日本大学松戸歯科大学

それは当時は歯をみがくというのは口腔衛生よりも主として見栄のためであったからであろう．従って居候の身では公然と歯をみがくわけにはいかなかったことがうかがわれる．

お歯黒の項（p. 85）に，お歯黒，鉄漿（かね）ともいう．

• 富む家も鉄漿の無心はなな所

はじめて鉄漿をつけるのを初鉄漿といいそのときには七カ所の家からもらうものとされていた．そこでいくら金持でもこの七カ所の家からわけてもらうことは仕方がなかったのである．

• 飛び飛びと鉄漿をもらって憎まれる．

鉄漿をもらうのに，先方の家を好き嫌いして，とびとびにもらってあるいたのが知れわたって，鉄漿をもらいに行かなかった家から憎まれる．という慣習上の違反者をなぶったものであろう．

• 初鉄漿はお茶の湯ほどに並べ立て，

はじめて鉄漿をつけるときには，茶の湯のときのように，いろいろの椀や刷毛や盥などを並べたてて大騒ぎをしたためであろう．

• 初鉄漿はぱちぱちとした顔になり，

ぱちぱちとした顔とは輪郭のはっきりした顔という意味であろう．色の白い娘は黒い歯が一層際立って美しくみえたであろう．

• 初鉄漿を小一里もらう村の嫁

村だから人家が少ない．そこで，鉄漿を七カ所の家からもらいあつめるのに，小一里の道をあるかなければならない，という寒村もあったであろう．

• おかしさは初鉄漿を子に泣き出され

結婚後に初鉄漿をするのは，妊娠，分娩などの機会をえらんだが，嫁があまり年がわかいと，程へてからやることもあった．すると，すっかり顔が変って，子供がこわがって泣きだすこともあったであろう．

• 初鉄漿のごぜ推量ではずかしさ

ごぜは盲目のことだから，かねをつけて自分の顔がどんなになったかわからないが，推量して恥かしがるとは，盲目とはいえやはり女性がためであろう．

• 七所袖をおうて礼に来る

鉄漿の礼といい，お歯黒がそまると，お歯黒をもらった七軒の家へ礼にいかなければならない．が，お歯黒がすぐ結婚とつながっている娘は，顔の変りと結婚の両方とが恥かしく，口を袖でかくして礼にまわったためであろう．

• 鉄漿の礼愛想をして泣き出され

初鉄漿の礼にいった娘がお愛想に先方の子供をあやしたが，お歯黒をつけたのですっかり人相が変り，子供はこわがって泣き出したことは想像ができよう．

• まさなうも後ろを見せる鉄漿の礼

“まさなうも”は“まさなくも”の音便で，けしからなくも，不都合にもの意．折角初鉄漿の礼にきながら，顔を見せずに向うを向いて背中ばかり見せるのはけしからんというわけ

• たアれか居やすと帰る鉄漿の礼

礼にいったが，誰かよその人がいるからと，入口をのぞいただけで帰ってきてしまうとは，まことにういういしい娘らしさがうかがわれる．

• だれだのとよくよく見れば鉄漿の礼

お歯黒をつけると，それほど顔変りがしてしまうというわけだが，わざとそういう風にわからない振りをして，のぞきこむ男もあったのであろう—「何処の神さんだとなぶる鉄漿の礼」

• どうで知れるにぶちまけなと鉄漿親

はじめて鉄漿をつけるときには，有徳の婦人をえらんで面倒を見てもらった．これを鉄漿親といった．鉄漿をつけるのは縁談がきまってからだから，その鉄漿親が，どうせ知れるんだから，どこへ嫁入りするのか教えろとせがむ場面が想像できる．—早手廻しにかねおやへぶちまける．

• すっぱりと荷もできている鉄漿祝

鉄漿祝は初鉄漿の祝いである．初鉄漿は元服にひとしい行事なので，これを祝ったが，鉄漿だけつけるのを半元服といい，さらに眉を剃り，髪の形をかえるのが本当の元服．とにかく，初鉄漿のときには嫁入道具もすっかりそろっているとは，まことに目出度いことである．

• 鉄漿沸かす前に吹殻拾い溜め

色艶がよく出るということから鉄漿にタバコの吹殻をまぜたらしい．また同じ理由で酒もいれた

と見えて「これ程飲んだら酔おうと鉄漿へ入れ」というのも散見できる.

● 酒しおや飴でいけぬとへのこなり

鉄漿へタバコの吸殻や酒を入れるが色艶をつけるために飴も入れたらしい. それでもうまくいかないと, 無禅の男に鉄漿壺をまたがせたという. 「まじないのへのこがきいて歯がそまり」

● むだをいいいいお歯黒を股ぐなり

その妙な役目をたのまれた男が照れかくしに無駄なことをしゃべりながらまたぐ情景が想像できよう.

● こづかれて御宰は壺をまたぐなり

御宰とは奥女中に使われる下男. 御宰にたのんで鉄漿壺をまたいでもらうのだが, 何しろ着飾った女たちの見ている前なので, 恥かしがって尻込みをするのを, こづかれて仕方なしに尻をまくりはじめる姿を想像すると面白い.

● 鉄漿へはったのは女筆のへのこなり

鉄漿壺の蓋へ男性の Organ の絵を書いてはると, お歯黒がよくそまるといわれた. それにしても, お歯黒がよくそまるために女ながらにへのこ (penis) を書いて貼るとは珍妙な風習もあったものだ. —「おはぐろの張札下女の筆意なり」というのも散見できる.

● 付いたかと歯ぎしりをして見て貫い

お歯黒のつけはじめに歯をぎしぎし噛みながらよくついたかと人に見てもらう.

● 真黒なくちゃくちゃをする恥かしさ

くちゃくちゃはうがいの古語, 鉄漿をつけたあとでうがいをすると, 黒い水を吐くが, これで一人前の女になるのかと思うとなんとなく恥かしくその女心をよんだのであろう. —「恥かしさ渋ウい粉を初になめ」

● うっかりと歯磨を出すつけたあと

お歯黒をそめると歯磨をつかわない. それは, つかうとお歯黒をこすりおとしてしまうからであるが, はじめてつけたあとでは, うっかり歯磨を出して, 母親に注意されることもあったであろう.

● 両耳のないので内儀かねを附け

鉄漿をつけるには耳盥という両方に耳形の把手のある小さな盥をつかったが, その用意がないので普通の盥をつかって代用したということをよんだものであろう.

● 妹がつけるで姉も鉄漿をつけ

妹に縁談がきまり, そこで妹がお歯黒をつけることになったが, 鉤合いがわるいので, 姉にもつけさせるという.

● ごぜのかね口惜しそうに見てもらい.

眉目の女が鉄漿がうまくついたかどうか口をあいて見てもらうのだが, 白い目をむきだし, 口をあけた表情が見えないために何か口惜しそうな感じとしてとらえられたのであろう.

● よしなよと下女お歯黒の肱で突き

下女がお歯黒をそめていると, そこへ下男がやってきて, どうだい, 鉄漿壺をまたいでやろうかと, いやな恰好をするので, 下女が恥かしがってやめさせる光景がうかがわれる.

第5部, 神仏の巻の項に

● かねにかこつけ庚申を嫁は開き (p. 150)

庚申の日は, お歯黒も, 針仕事もやらなかったらしい. それは, 金気のものを忌むためである. 五行説からでた因習とされている.

● 猫よりも歯をまっくろにするがよし (d. 153)

黒猫を飼うよりも嫁にいくか婿をとるかして, 歯をそめる. 即ち結婚するがいい. とは現在でもオールドミスが異常とも思われるほどペットを可愛がる姿をみることができよう.

第12部　年寄りの巻の項 (p. 360) に

● 三つのうち目も歯もよくて哀れ也

「歯目まら」といい, 老衰はこの順序で現われるというが, 歯も目も丈夫なのに3番目が弱ってきてはまことに情けないと真にせまっている. 「目は目がね, 歯は入歯にて間にあえど」は間に合わないのは今一つの3番目がかくされていてにくい. そうなると眼や歯のいいのがかえって癪にさわるであろう. 「眼も歯もよくて残念さ残念さ」

第15部　岡場所の巻の項 (p. 393) の楊枝見世の項に

● 顔へ穴をあけて楊枝を十本買い

店の娘の顔を穴のあくほど見てから, 楊枝をたった十本買って行く. これと同じ内容のものに

「わずかな恋をしにくる楊枝見世」というのがある．楊枝見世とは，浅草観音の左右や前の参道，つまり仲見世に床店という仮店をはり，美しい女を看板において楊枝をうっていた．また浅草附近には水茶屋という茶店もありこの両者こぞって美女を見世に出した．即ち看板娘である．

• 白い歯を見せれば売れる楊枝見世

楊枝と白い歯をかけた句で，白い歯を見せるとは愛想笑いも含まれているのであろう．—「化けそうな白歯の多い楊枝見世」

• 屋根を上げ縁を下ろすと楊枝見世

畳見世といって，組立式の見世で屋根をかけ，床板をはめればすぐに楊枝見世となる．いとも簡単なもので，そこに看板娘が顔をみせていたのである．

• なめたのはないかと嬲る楊枝見世

男は少し馴染になると，「お前の可愛い口でなめたのはないかい．ほんのりと紅のついてるのがさ」なんてじゃれかかったことであろう．

• 手を握る所へ銀杏一つ落ち

楊枝見世のそばに大きな銀杏の木があったのであろう．その銀杏の実が楊枝見世の娘の手を握ったところへすとんとおちて，ハッとさせたときによんだものであろう．—「銀杏がおちると楊枝置いて立ち」

• 楊枝でもふしでもなくて腰をかけ

楊枝見世では，お歯黒をそめるふしも売っていた．ところが，楊枝を買うでもなく，五倍子をかうでもなく，ただ縁台に腰をおろす男もいた，それは看板娘にひかれたためであろう．—「美しさ男へたんとふしが売れ」

• 楊枝より娘柳で売れるなり

柳は柳腰．楊枝見世は楊枝見世は楊枝のよしあしよりも娘のよしあしで売れるともじったのであろう．—「柳と娘こきまぜる楊枝見世」

• 摺古木でなぶって通る楊枝見世

摺古木は浅草の歳の市の買物．景気よく一杯やって，摺古木をかついで帰る男たちが，楊枝見世の娘に「やーい，これでこづいてやろうか」とエッチな風刺をよんだものであろう．

• 楊枝見世母代り合う訝しさ

楊枝見世は床店で，母屋から通ってきた．「其客で内からちょっとようじ見世」の句のあることから見ると，娘の馴染客がくると母屋から呼びに来て，母とかわりあうのだろう．その間の事情を察して，いぶかしやといったのであろう．

• 楊枝見世生マの豆も売る所

観音様には昔からたくさん鳩がいたから豆も売ったろう．だが，楊枝見世で片手間に売ったのは生マの豆．—「楊枝やは戸板に豆を出して置き」

• 浅草で高い楊枝を武士つかい

「武士は食わねど高楊枝」という．高楊枝とは食後に小楊枝をつかうことである．本句は田舎侍が浅草の楊枝見世の女に思いをよせて，値の高い楊枝を買って行くのを武士の高楊枝にかけてよんだものであろう．—「侍が来ては買ってく高楊枝」

第16部　吉原の巻のおはぐろどぶの項（d. 449）に．

• おはぐろは外と泥水は内にあり

売春を職業とすることを泥水稼業といった．千客万来で肌をけがし，どろどろによごれるからである．その泥水とおはぐろどぶとをかけてよんだものであろう．おはぐろどぶとは，吉原の外廓をめぐらす下水．女郎の逃亡をふせぐためにつくったもので，幅四メートルほどあったという．吉原中の汚物が流れこんで嘔吐をもよおすばかりだったというが，このどぶをこえて脱走する遊女もあったということである．

• 大どぶの向うへ残す上草履

女郎の有名な上草履，それを身投げをするときのように，向う岸に残して，どろだらけになって，どぶをわたって逃げたのであろう．その後をどういう風に始末したであろうか．—「お歯黒を越したがあとのむずかしさ」

• 吉原の酒お歯黒へ流れこみ

酒そのものが流れこむのではなく，飲んだ酒が客の体内をとおって，小便となって流れこむの意でこのおはぐろどぶは大変に不潔であったであろう．

3. 川上三太郎著，川柳入門

第3編　川柳時代別句集のなかから歯科に関するものを抜抄した．その時代別は柳多留，明治，

大正，昭和にわけられている．

柳多留時代川柳集には，「食ひつぶす奴に限って歯をみがき」の一句を散見できるが明治時代川柳集にはみられない．

大正時代川柳集には，●糸切歯仕立おろしを着せる朝．●散髪屋往来を見て歯を磨き，●福引所君も歯磨かと笑ひ．●数の子が奥歯から出る二日酔．

昭和時代川柳集には，●歯が一つ抜けて紋付父に似る．●歯の隙も淋し初老の茶をすする．●光る物ばかり歯科医で子は黙り．●かけた歯をいたはってゐる舌の先．●歯の痛い女へ雨が降り続き．●皓歯ひかる理智ととのへしつかのよを．●クラス会みんな自分の歯を誇りなどで何れも難解なものはない．

4. 岸本水府選評　放送川柳

身辺の項に，●歯をみがく父にやっぱりある威厳．●日本が見えた朝日へ歯をみがき（これは引揚者や復員兵をうたったものであるが，今日の海外旅行者にもあてはまるであろう）．●歯をみがく間も金策を考える．●半分は恋人のため歯をみがき．●歯ブラシも一本ふえたお目出たさ．●歯ブラシが母から順に濡れて無事．●親と子が競走という歯をみがき．●歯をみがくそばで弁当出来てゆき．●歯磨も理屈っぽくて世が進み．●井戸の蓋へのせる歯磨さまざまに．●お父さん一分間で歯をみがき．●出し過ぎた煉歯磨をもてあまし．●すりへった歯ブラシでよい妻四十．●恋はふと煉歯磨の甘い味．●歯みがきを使わず九十までも生き．●朝と夜いい子にされる歯をみがき．●起されて半分ねてる歯をみがき．●磨いた歯イーイーをして逃げて行き．●老人の一徹塩で歯を磨き．

5. 川上三太郎編，新川柳一万句集

第1篇，第1部　人の一生（2）　身体の項に，●入歯して親しみのない母の顔．●つつましき女に白き淋しき歯．●セメントを詰めても甘い物が好き．●柔かい力鬼灯歯にふくれ．●辛辣なものに奥歯の虫があり．●ふと寝てた事に気がつく歯の痛み．●ひとの噛む煎餅痛む歯へ響き．●歯の隙を調べるやうに妻揚子．●糸巻がくるりと踊る糸切歯．●止め糸の切れた歯の音草疲（くたび）れる．●鶏小屋の掃除それから歯を磨き，又，口をよんだものに，●頼まれた綻び口で糸をきり，●見台へ泣いて呉れろと口を曲げ．●父さんの眼鏡をかけて口をあき．●笑ふたび嫁の片手は口へ来る．●腫物のまわりを髭は薄く伸び．●頬ぺたをペコンとさせて種を出し．●耳掃除奥歯へ響く心持ち．●画の風呂顎まで入れて唄になり．●遠慮する咽喉にゴクリと音がする．●咽喉仏カラーを取るとちと動き．●笑ってはいけぬと咽喉を剃はじめ．●舌打ちをして冷たい茶．●

又，人の一生（4）の歯痛の項に

●ほっぺたが叩き割りたい歯の痛み
●歯の医者へ今来た人も泣きたさう
●歯の痛くなるのを虫歯待ってゐる

又，人の生活（4）の職業の項に，歯科とは違うが，歯入屋に，●歯入屋は調子を取って棒で打ち．●下駄歯入れ呼ばれた家の塀を背負ひ．又，神主その他の項に．●ピンセット含嗽をさせて又覗き．●馬鹿らしい顔にも歯医者笑はれず．●むずかしい細工歯医者も口をあき．●歯医者まだ何かする気のうしろつき．●急症と見えて歯医者へ燈がともり．

考証と結び

柳多留は家内喜多留（やなぎたる又柳樽）とも書き，初代川柳が選んだ句を呉陵軒可有（ごりよけんかゆう）という人が句集に編集して，明和2年（1765）にその初篇が刊行され，初代川柳が歿する前年の寛政元年までに23篇が出版された．これが明和，安永，天明の川柳として江戸時代の川柳を代表するものといわれている．その後川柳歿後柳多留は24篇以下が続刊されて，天保9年（1838）まで70余年にわたり実に167篇まで刊行されたものである．しかし，年月が経つとともにその内容がだんだん卑俗となり現在，狂句という名で真の川柳とわけられている卑俗，低級の句の多くは，何れも寛政，文化，文政，天保の江戸後期時代の所産に属するもので，柳風狂句ともいわれている．一般にこの柳多留を始め明治前の川柳を古川柳と称し，明治以後のものを新川柳と呼んでいる．しかし明治時代といっても，川柳が新川

柳として再起したのは明治35年（1900）頃で，それ以前の明治はむしろ江戸後期と同じく猥雑下品な狂句時代ともいわれている．田辺氏の古川柳風俗事典にこの種の句の多いのはこのためである．従って，明治後期の新川柳は誤解を正すために，あるいは口に筆にあるいはその作品にその全力を傾倒しその特長に俳句よりもむしろ和歌の語脈を引いたものが多い．

大正時代は明治で芽をだした新川柳が正に開花せんとした時代で，派手で，陽気で，まことに楽しい句が多い．

しかし，やがてその末期には活字文化の影響をうけ，従来の耳から入った川柳へ，更に眼から入る川柳が加わり，しかも眼からの川柳の方が強いイメージを打ちだし，昭和の時代に入るのであるが，最近の傾向として言論の解放に伴い社会性，政治性を帯びた句が多くなった事で，これを時事吟とも呼ばれている．例えば，読売新聞の川柳欄について昭和50年1月から同3月までの医師（医療）や歯科医師（歯科医療）をとり扱ったものをみると次の如くである．

- 無学でも医者の過保護は知っている．
- 虎の尾は触らぬがよし医師課税（以上1月）．
- ままならず昔僧兵今医師会．
- 歯科医療の汚点をドリルで削りたい．
- 昔なら家の建つよな入れ歯代（以上2月）．
- ブーともニャンとも苦情のないのは獣医だけ．
- スト告発の110番もほしくなり．
- 中原君もやるじゃないかと武見言い．
- 歯は台湾堕胎は日本という医療．
- 歯科医より欲しい「さそり」の110番．
- 長者番付に歯科医も出てきそう．
- 悪徳歯科医に抜かせたい狼の牙．
- とりすぎた歯科医マスコミ吐き出させ（以上3月）

などの多くは一時的泡沫的な題材を扱っている感もないではないが，将来これら時事吟の推移から歯科医療の史的展望に期待される点も多かろうとも思われる．（本論文は昭和50年4月第77回例会および同年7月第79回例会において発表した．）

文　献

1）山本成之助：川柳医療風俗史．牧野出版，東京，昭和47年9月．
2）田辺貞之助：古川柳風俗事典．青蛙房，東京，昭和37年7月．
3）川上三太郎：川柳入門．大文館，東京，昭和35年3月．
4）川上三太郎：新川柳壹萬句集．磯部甲陽堂，東京，初版昭和2年9月．4版同6年2月．
5）岸本水府：放送川柳．新日本放送，大阪，昭和30年4月．